肘歴通信 第八號（ごう）

「肘折の伝統こけし　黎明期」のこと

～肘折温泉の佐藤周助こそ、伝統こけしに毒を盛った最初の木地師である～

（こけし辞典より　注：褒めています）

肘折生まれの人なら幼少期より身近に接していた「こけし」

その発生は「山岳信仰」と「大衆文化」にあると云われます。

弥次喜多　珍道中

江戸時代後期、伊勢金毘羅参りが大衆に浸透すると、御利益を託したお札、御朱印帳などを地域に持ち帰る「お土産」が始まりました。

そして、農耕地域であった東北では、農耕の水源である山岳への「信仰」と、山岳のエネルギーの象徴である「温泉」が結びついた「湯治文化」が生まれます。

温泉に浸かることで、農作業の疲れを癒すと同時に、五穀豊饒・無病息災の祈りを捧げ、神聖な山岳の木々から作られる木地製品を「お土産」に持ち帰り、特に子供へのお土産の玩具であるヒトガタ、「こけし」に神秘性を見出しました。

当地肘折温泉では、八鍬林蔵の息子である酉蔵（とりぞう）（後に柿崎伝蔵を襲名）が、鳴子温泉で木地技術を学び、明治 10 年頃に帰郷したのが始まりで、養子の柿崎藤五郎、奥山運七へ引き継がれました。

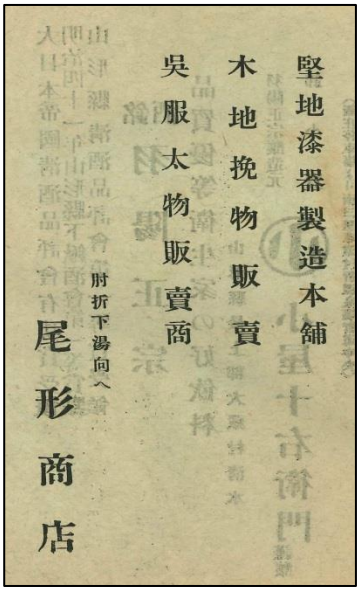
（柿崎藤五郎もまた、木村富吉・早坂松吉・西谷要吉・八鍬亀蔵へと技術を伝えましたが、こけしが現存するのは弟弟子の奥山運七のみ。）

うんつこけし

特に奥山運七のこけしは「うんつこけし」と呼ばれて人気を博し、肘折系こけしの原型となりました。

明治半ばには、佐藤周助(重之助の祖父)や佐藤文六といった木地師が移り住み、多くの弟子を育て、仁右衛門商店や旧・尾形商店で技術を競い、最盛期には50人以上の職人が肘折に居ました。

（佐藤周助の弟子には元河原湯の横山政五郎、佐藤文六の弟子には斉藤旅館の斉藤伊之助、新聞屋の鈴木幸之助がいます。）



肘折は東北有数の木地産地だったのです。

（字数に限りがあるため、歴代木地師の方々の敬称は省略させていただきました）

現在、昭和10年代・40年代に続く、「第三次こけしブーム」と云われ、若い女性を中心にこけしファンが増えてきています。　ファンの数に比例して、古作のこけしも注目されており、肘折の古作こけしは数百万円で取引されることもあります。

佐藤文六のこけし

佐藤周助のこけし

こけし造り（木地挽きの文化）とは、
「山岳信仰」と「湯治文化」を繋ぐもの。

湯治文化・山岳信仰の歴史では他産地の追随を許さぬ肘折温泉の肘折こけしこそ、東北伝統こけしの中で、こけしの本質を最も体現しているのではないでしょうか。

肘折歴史研究会